

T 日程・英語外部試験利用入試 1 限

科 目	ページ
数 学 ①	2～13
数 学 ②	14～45
地 理	46～61
国 語	87～63

〈注意事項〉

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 志望学部・学科によって選択する科目・試験時間が決まっているので注意すること。

志望学部(学科)	受験科目	試験時間
下記以外の学部(学科)	数学①または国語	60分
文学部(日本文)	国 語	90分
文学部(地理)	地 理	60分
情報科学部(コンピュータ科・デジタルメディア)	数学②	90分
デザイン工学部 (建築・都市環境デザイン工・システムデザイン)		
理工学部 (機械工〔機械工学専修〕・電気電子工・応用情報工・ 経営システム工・創生科)		
生命科学部 (生命機能・環境応用化・応用植物科)		

4. 科目の選択は、受験しようとする科目の解答用紙を選択した時点で決定となる。一度選択した科目の変更は一切認めない。
5. 数学②・国語については、志望学部・学科によって解答する問題番号が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
6. 数学①②については、定規、コンパス、電卓の使用は認めないので注意すること。
7. マークシート解答方法については、問題冊子を裏返して裏表紙の注意事項を読みなさい。ただし、問題冊子を開かないこと。
8. 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意(共通事項)

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどを使用しないこと)。

記入上の注意

1. 記入例 解答を3にマークする場合。

(1) 正しいマークの例

A	①	②	●	④	⑤
---	---	---	---	---	---

(2) 悪いマークの例

A	①	②	●	④	⑤
---	---	---	---	---	---

B	①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---	---

C	①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---	---

枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

2. 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
3. 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
4. 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

「数学②」(情報科学部・デザイン工学部・理工学部・生命科学部)

マークシート解答上の注意

「数学②(情報科学部・デザイン工学部・理工学部・生命科学部)」は「数学①(それ以外の学部)」と異なる科目です。

問題中の ア, イ, ウ … のそれぞれには、特に指示がないかぎり、- (マイナスの符号), または0~9までの数が1つずつ入る。当てはまるものを選び、マークシートの解答用紙の対応する欄にマークして解答しなさい。

ただし、分数の形で解答が求められているときには、符号は分子に付け、分母・分子をできる限り約分して解答しなさい。

また、根号を含む形で解答が求められているときには、根号の中に現れる自然数が最小となる形で解答しなさい。

〔例〕 $\frac{\boxed{\text{ア}} \sqrt{\boxed{\text{イ}}}}{\boxed{\text{ウエ}}}$ に $\frac{-\sqrt{3}}{14}$ と答えたいときには、以下のようにマークしなさい。

ア	●	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
イ	⊖	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
ウ	⊖	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
エ	⊖	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨

※ 「数学①」の選択肢には- (マイナスの符号) はありません。

(国)

(語)

●法学部・文学部(哲・英文・史・心理学科)・経済学部・社会学部・経営学部・国際文化学部・人間環境学部・現代福祉学部・キヤリアデザイン学部・GIS(グローバル教養学部)・スポーツ健康学部のいずれかを志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕に解答せよ。

●文学部日本文学科を志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕すべてに解答せよ。

〔一〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの各文の傍線を付した言葉に最も意味が近いものを後の選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 相手の気持ちを斟酌して、自分の考えを言うのを控えた。

ア 信憑しんぴょう イ 解釈 ウ 踏襲 エ 追従 オ 付度そんたく

2 原則に拘泥しすぎると、本当に大切なものを見失ってしまう。

ア のつとる イ したがう ウ こたわる エ さからう オ もとる

問二 つぎの文章の傍線を付した表現の中から、誤った使い方をしているものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

昨年アの国際大会で八面六臂ろっぴの活躍をしたAさんは、弱冠イ二十歳の若者ながら世間の期待を一身ウに背負っていた。そして大方エの案に違わず今年も代表に選ばれた。インタビューで「絶好調です。期待して下さい」と語ったAさんには、いやがおうオでも周囲の関心が集まっている。

問三 つぎの各文の空欄に入る語を、後の選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1 某作家の新作は、古典を換骨奪 \square して斬新なものに作り変えており、高く評価されている。

ア 体 イ 胎 ウ 替 エ 態 オ 戴

2 けんかをしている友人から、木で \square をくくったような反応をされる。

ア 輪 イ 竹 ウ 腹 エ 鼻 オ 枝

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある重要な気づきをもたらす言葉にふれることによって、私たちの世界観が一変することがあります。一つの言葉との邂逅^aによって世界が、まったく異なるもののように感じられるのです。

こうした気づきをもたらす言葉は、一見すると外からやってくるように見えますが、それはすでに自らのうちにあつて、見出されることを待っていたのではないのでしょうか。出来事は、あたかも小さな灯りとなって、暗がりになっていた私たちの内面をそつと照らし出すのではないのでしょうか。

詩、それは星のようにもう古いものだ。

中空にみちるほどあつてまだ空中衝突しないものだ。

〔『短章集』〕

詩は、人間の心に古くからある。それは深層心理学者のユングの考えを借りれば、個人の心を超えて、人類の記憶として受け継がれている。詩を書く、あるいは詩を読むとは、そうした内なる古¹い人に出会う道程なのかもしれません。

『短章集』というのは、詩の原型となるような言葉によって編まれた永瀬清子（一九〇六―九五）の著作です。詩を書いてみたと思う方は、ぜひ、一度この本を手にとられることをおすすめします。私にはもつとも優れた、そして熱を帯びた詩の入門書であり、そのオウギ^bが記されている一冊のように感じられます。

また、先の一節のような短い、しかし、何かがほとばしるような言葉、詩の姿をとることはないが、存在の深みに導くような言葉を永瀬は「短章」という形式によって表現できることを「発見」した、といつてよいように思います。それは子規²による近代俳句の「発見」に比すべき重要なことのように私には映ります。

まだ、詩を書くことはできない、と感じている人も「短章」であれば書ける。また、「短章」を書き継ぐことこそ、自分にとつての詩とは何かという問いを見極めていく、もつとも確実な道のようにも感じます。

誰にとつても初めて詩を書く、という時機があります。あるいは詩を書き始めても、迷いの中で詩をつむぐこともあります。そうしたとき、次に引く永瀬清子の言葉に出会いました。

詩を書く時は出し惜しみせず中心から、最も肝心な点から書くべきだ。最初の行がすべての尺度になる。

まわりから説明して判らそうとすると詩はつまらなくなる。すべてはその親切程度に平板に散文化し、中心さえも「説明」の一部になる。

つまり詩の行には大切な独立力があるので、本心をつかまぬ行に最初の一行を任すべきではない。又次の行をも任すべきではない、又次の次の行も任すべきではない。

云いかえれば肝心な中心を捕えれば第一行が次行を、そして又次行が第三行を指し示し、又生んでくれる、とも云える。そしてそこにリズムが生れる。

つまらぬ所から説きはじめればついに中心に行き合わぬ。そして読者の心にもついに行き合わぬ。（『短章集 続』）

この言葉は、私にとつて詩を書く態度に大きな変化をもたらしました。詩に向き合う態度を問い質されたように感じたのです。最初の一行を全力でつむぐ。これを実践するのは簡単なことではありません。実行できるのは、何篇も詩を世に送り出した詩人だけだ。これから詩を書くこうとする人間にはできない。そう感じるかもしれません。

しかし、よく考えてみましょう。どんなによく知られた詩人にも試作はあります。完成できなかった詩、書き続けることのできなかつた詩、思うようにならなかつた詩があります。世に詩人と呼ばれる彼、彼女らも文字通りの意味で、何ものかとの闘いのなかで言葉をつむいできたのです。別な言い方をすれば、詩人こそ、詩を書くことにおいてもっとも多くの挫折を経験しなくてはならないともいえます。

先の言葉を永瀬は、他の人ではなく、自分自身にむかつて書いています。全身全霊を託することができないような言葉を、おまえは世に送り出すつもりなのか、と自ら問い質しているのです。「詩を書く時は出し惜しみせず中心から、最も肝

心な点から書くべきだ。最初の行がすべての尺度になる」という一節は、彼女自身の胸を打ち破って出てきているのです。

詩をつむごうとするとき、最初に書いた言葉が、完成された詩の最初の一行になるとは限りません。そのことは永瀬も経験的に知っていたはずですが、しかし、そうした結果とは別に、「書こう」という意識が心の全体を覆いつくす前に、無意識の深みから湧水わきみずのように生まれてくるコトバをけっして見過ごしてはならない、というのは、本当だと思えます。詩を書こうとするとき、すでに意識の上で言葉になったものをなぞるのではなく、未だ言葉にならないコトバを、わが身を賭して写し取れ、というのです。

原型としての詩は言葉の姿をして私たちの前に現われない。それはさまざまコトバの姿をしています。ある人にはうごめく色彩として、別な人にとってはうすまぐ芳香として感じられる。永瀬の場合はある律動、「リズム」として現われたのでした。

最初はかすかな予感である。

次第に揺すれリズムが生れる。

それは詩人の中にあるのだが、肝心なことは、読者の中にも生じると云うことである。

(『短章集 続』)

詩を書くとは読み手に言葉を届けることに終わらない。リズムもまた、届けることになる。あるとき、読み手は書き手よりも敏感にリズムを感じることにすらある。先の一節のあとに彼女はこう続けています。「しかし出来合いの、あり合せのリズムは、読者をより早く嫌悪させる」。

詩を書こうとするとき、私たちは「詩のような」作りものを生んでしまう。それは、よいことをしようと思いついて何かをしなくても、しばしばぎこちない、どこか独りよがりな行動になるのに似ているのかもしれない。

詩は「作る」ものではなく、すでに胸の深みに宿っている何かを「生む」ことだと永瀬清子はいうのです。

先に見た「

X

」言葉とは、自分を偽って書いた言葉、自分を装って記した言葉にほかなりません。自分に嘘をつ

いて現われ出した言葉が、真実を求めている読み手に、どうして届くことがあるだろう、と永瀬はいうのです。

コトバとして現われた、命名しがたい意味のうごめきを言葉によって受けとめようとする事、それが永瀬が経験していた「詩作」の現場でした。コトバは言葉の器を超える勢いで私たちに迫ってきます。詩作はどんな大詩人にとっても、つねに失敗になることを宿命づけられた営みだともいえそうです。

しかし、ここに読み手が存在する意味もあります。書かれた言葉を完成に近づけていくのは読み手の仕事です。深い意味を携えて生まれてきた詩は多くの読み手の参与を求めるようです。『万葉集』や『古今和歌集』をはじめとした和歌がいくつもの世紀を超えてなお読み継がれている理由は、こうしたところにもあるのです。誤解を恐れずにいえば、詩人が読み手を求めるだけでなく、詩そのものが読み手を求めるのです。

詩の言葉は次の言葉を呼ぶ。それが詩の原理だ。まずそれを体得しなくてはならない、と彼女は考えています。

別ない方をすれば、詩の最初の一行になる言葉と出会うまで、何度でも、心を新たに詩をつむがねばならない。そう彼女はいいたかったのではないのでしょうか。詩の最初の一行を書くのは、けっして簡単なことではありません。彼女は別なところで次のように述べています。

詩の第一行を書きとめるのは朱鷺とぎに餌づけをするようにむつかしい。

（「朱鷺」『短章集』）

朱鷺は、大変に警戒心の強い鳥です。人間が自由に飼育しようとしてもなかなかうまく行きません。詩は朱鷺の餌づけに似て、書き手が「自分」というものをあまり強く前に出すと生まれにくくなる、というのです。先の言葉に彼女はこう続けています。「自分はいないもののように茂みのかげに4しずかにかくれていなければならない」。

自分のおもいを変容させること、自分のおもいを自分だけのおもいに留まらせないこと、おもいを自分の色に染めつくさないこと、それが詩を書くものに求められる態度だというのです。

おのれを語るな、と永瀬はいうではありません。誰にとっても自己は、いつも自分と異なる姿をしていることを忘れてはならないというのでしょうか。

「私が私のやり方で万物を捕えるのと同じように、すべての物はすべてのやり方で私を捕える。私が生まれて以来、年百年中そうであったのだ」（『短章集』）と永瀬は書いています。あえて自分を表現しなくても、あらゆることは自分の「やり方」でしか試みることができない。「うまく」書こうとすることが詩の生命を損なうのはそのためです。

（若松英輔『詩と出会う 詩と生きる』より）

問一 波線部 a「邂逅」b「オウギ」について、以下の問いに答えよ。

a 「邂逅」に最も意味が近いものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 同伴 イ 対面 ウ 理解 エ 親交 オ 遭遇

b 「オウギ」に使われている漢字と同じものを含む熟語をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 戯作 イ 擬人 ウ 義務 エ 議事 オ 神技

問二 傍線部 1「内なる古い人に出会う」とはどういう意味か。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 詩を通して、かつて知っていた人のことを遠い記憶の中から呼び起こすこと。

イ 詩を通して、無意識の中に存在している普遍的な記憶を呼び覚ますこと。

ウ 詩を通して、会ったこともない自分の先祖の記憶をよみがえらせること。

エ 詩を通して、自分の中に眠っている、忘れていた古い記憶を思いだすこと。

オ 詩を通して、かつて記憶の中にいたもう一人の内なる自分と再び出会うこと。

問六 傍線部4「自分はいないもののように茂みのかげにしばらくかくれていなければならない」と永瀬清子は書いているが、

それはなぜだと筆者は考えているか。つぎの中から、当てはまらないものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 詩の一行目となる言葉と出会うまでは、自分の心を凝り固まったものにしてはならないから。

イ 朱鷺に餌づけをするように、自分以外の存在も大切にしなければ、詩の言葉は生まれないから。

ウ 詩は作者である自分のおもいだけでなく、誰の心にも通じる回路を持たなければならぬから。

エ 自分のおもいを押し出そうとしすぎると、かえって詩の言葉は生まれにくくなってしまふから。

オ 自分を意識的に出そうとしなくても、詩には自分のおもいがおのずと現れてしまうものだから。

問七 本文中に述べられている筆者の永瀬清子に対する考えと合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 永瀬清子の『短章集』は、詩作の態度とともに詩の技巧や効果的な表現法についても教えてくれる最適な入門書である。

イ 永瀬清子の『短章集』を読めば、まだ詩を書けないと知っている人でも、自分にとっての詩とは何かがわかってくる。

ウ 永瀬清子は、詩作の過程で自ずと生まれてくる詩のリズムに関して、読者の受け取り方をも重視したいと考えている。

エ 永瀬清子は、自分の中の深みにあるものを表す言葉に最大限の工夫をこらすことで、良い詩が作られると考えている。

オ 永瀬清子は、読み手が解釈したり新しく意味を汲み取ったりして味わうことで、自分の詩は完成すると考えている。

問八 本文における「コトバ」とはどういうものか。三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

(下書き用)

40 30

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

森には広大な緑がある。人間がそこから資源を奪い取っても、森には再び緑が生い茂り、新しい資源を生み出してくれる。そうした無尽蔵の力を信じられるからこそ、人間はいつか自然から資源が枯渇するのではないかと不安に苛まれることな^{さいな}く、資源を収奪することができるのである。そのようにして人間は自然に依存し、自然に「甘える」ことができる。

このような自然観は、一方において、自然に対して人間を超えた力を認めている。しかしそれは、決して、人間と自然の調和を目指すものだけではない。まして、そこから自然を大切にしようという倫理的な配慮が必ず導き出されるわけではない。このような自然観において人は自然を崇拜するかもしれない。しかし崇拜しているからこそ、自然に甘えることが可能になり、また自然を搾取すること、自然に対して暴力を行使することもまた可能になるのである。

こうした自然への甘えは、人間に対して、未来世代への自らの影響について配慮することも免除する。たとえ現代が何らかの失敗を犯したとしても、自然はその失敗を帳消しにし、なかったことにしてくれるからだ。例えばこのような自然観のもとでは、人間が森から木を伐りすぎても、自然がすぐに再び木を生やしてくれるので、未来世代も自分と同じように森から木を伐ることができるはずだ、と考えることができるのである。

自然が人間よりも強い力を持ち、自己修復能力が機能している限り、現代世代は未来世代に影響を及ぼすことができない¹。したがって未来倫理を必要とする課題もそこでは生じない。そうである以上、現代世代が未来世代に影響を与えることが可能になるとしたら、それは人類の力が自然の自己修復能力を超えたときである。そして、そうした力を人類に与えたものこそ、「技術」に他ならない。

技術とは何だろうか。それは伝統的な哲学におけるとても大きな問いである。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、技術を、ある目的を達成するための手段を製作する営みとして定義した。人間がそうした活動をもつともうまく果たすことができるのは、自然現象を人工的に模倣したときである。したがってアリストテ

スは技術を「自然の模倣」として説明している。

例えば伝統的な農業では、春に種を播いて、秋に作物を収穫する。これは自然界における植物のあり方を模倣した技術である。夏に種を播いたり、冬に収穫しようとしたりしても、農業はうまくいかない。なぜならそれは自然を模倣できていないからである。したがって技術をうまく行使するために、私たちはまず自然をしっかりと観察し、その本質を理解しなければならぬ。農作物が自然においてどのように育つのかを知らなければ、農業をうまく行うこともできないのである。

こうした技術観は、自然が人間を X 存在であり、人間よりも優れていると考える自然観の上に成り立っている。人間が自分で考えついで行うことよりも、自然の摂理に従ったほうがずっと確実であり、はるかに信頼できると考えられているのだ。そして、こうした技術観もまた人類の歴史の非常に長い期間を支配していた。

例えば、一五世紀の発明家であるレオナルド・ダ・ヴィンチは、人間に空を飛ぶことを可能にする機械を構想した。その際、彼はまず鳥の羽の構造を観察し、鳥がどのようにして浮力を作り出しているのかを、その羽の形状と運動から分析した。そして、同じ原理によって人間が空を飛ぶために必要な技術的機構を考案したのである。実際に、ダ・ヴィンチの考えた空飛ぶ機械は実現しなかったが、ここには「自然の模倣」という技術観の反映が見られる。すなわち彼は、空を飛ぶ技術を実現するために、まずは自然において空を飛んでいるものを観察し、それを模倣しようとしたのである。

しかしこうした技術観は近代の始まりとともに覆されていく。その変革を起こした代表的な思想家が、一六世紀の哲学者フランシス・ベーコンだ。

技術を「自然の模倣」として捉えるとき、私たちは自然を観察し、そのあとにそれを技術へと落とし込んでいく。まずは自然の観察、次に技術への実装という順番だ。この順番は変わらない。第一に優先されるのは自然を観察することなのである。それは「自然ファースト」な発想²である、と表現できるかもしれない。このとき自然の観察はあくまでも技術に先行するものとして位置づけられている。つまり、自然の観察そのものは、あとでそれを技術に使うかどうかとは無関係に行うことができる。自然の観察にとって、その成果を技術に使うか否か、ということは、あくまでも「おまけ」に過ぎない。

ベーコンはこのような発想を根本的に変更した。彼によれば、自然の本質は、人間が自然に対して積極的に働きかけ、その結果を検証することによって、初めて解明される。そうした働きかけこそ「実験」に他ならない。

例えば、近代科学の父と言われるガリレオ・ガリレイは、重たいものほど早く落下するというアリストテレスの自然哲学を反駁はんぱくするために、レールを使って異なる重さのボールを落とす実験を行った。このとき彼は単に自然を観察することによって知識を得たわけではない。わざわざ重さの違うボールを用意し、わざわざレールを作り、それを自分で動かすことによって、自然法則を解明しようとしたのである。レールも、ボールも、明らかに自然なものではない。誰も踏み入れない森の奥地で人知れずレールの上を重さの異なるボールが転がってなどいない。ガリレオは、そのように自然には存在しない人工的な環境を技術的に構築することで、むしろ自然の本質に迫ろうとしたのである。

ベーコンは、このような実験こそが、人間の知識にとって不可欠の契機であると考えた。実験は、自然を理解するために、自然に対して技術によって働きかけることである。³ 自然をただありのままに観察していても、自然を理解することはできない。それを可能にするのは実験という技術の営みなのだ。この意味において、ベーコンはもはや自然ファーストではなく、「技術ファースト」な考え方をしている、と言えるだろう。⁴

ところで実験は、人間の技術によって行われるものである以上、人間によってコントロールされ、管理されている。そして、そうした実験によってしか自然が解明されない。そうである以上、人間が自然を解明できるのは、自然を技術によって再現し、自らコントロールできるからである、ということになる。

そのように考えるとき、ベーコンの発想はもはやアリストテレス的な「自然の模倣」ではなく、「自然の支配」を可能と見なすものとして捉えられる。自然を人間よりも優れたものとして模倣する態度は、自然を自らの関心に従って操作し、管理しようとする態度へと、転換する。自然は人間を圧倒的に

X

存在ではなくなり、人間によって支配され得る対象へと変わってしまうのである。

こうした自然観の変化は人間の生き方にどのような変化を与えたのだろうか。

前述の通りアリストテレスは、自然を観察すること、彼の言葉で言えば「観想」が技術に先行すると考えていた。しかしそれは、観想が技術のために求められる、いわば技術を発展させる手段として求められる、ということの意味するわけではない。なぜなら彼にとって、観想はそれ自体で価値のある行為であり、それ以外の何かのために役立てられるものではないからだ。アリストテレスの哲学において、観想とは神の永遠不変の活動に参与することであって、観想に即した生活をするのが自足した幸福な生き方である。それを技術に活かせるかどうかは、観想そのものの価値と何ら関係がない。

これに対してベーコンは、こうしたアリストテレスの考え方に与しない。自然を観察する人間の認識は、常に間違ったものであり得るのであり、だからこそ技術的な実験装置によって自然を解明するべきだ。それを「精神と宇宙」の「結婚」にたとえるベーコンは、科学と技術の営みが目指すものを次のように表現する。⁶

我々は精神と宇宙とが結ばれる部屋をば、婚事に係わる神の善意によって、花を散らし飾り立てたものと認めるのである。
 頌婚の歌は、人々の窮乏と憐れな状態とをいくぶん阻止しかつ緩和する、人類への援助と諸発見の一族とが、この結婚から生まれることの願いにしたいと思う。

すなわち、人間が自然を認識するのは、自然を認識することそれ自体に価値があるからではなく、それによって「人々の窮乏と憐れな状態」を「阻止し緩和する」ためである。ここには、科学の価値が技術への応用のうちにあり、そして技術の目的が幸福の実現にある、というベーコンの考えが反映されている。

人間が自然を支配するのは、人類に幸福をもたらすためである。こうしたベーコンの思想がその後の思想史に与えた影響は計り知れない。

実験に基づく自然の探究を重視する態度は、一七〇一八世紀に隆盛した啓蒙思想へと結実する。これは、人間が理性の力によって自然に隷属した状態を乗り越え、社会を進歩させることができると思える思想運動である。一八世紀の後半には産業革

命が起こり、科学と技術は相互に一層緊密に連動することになる。ヨーロッパ諸国の産業の工業化が推し進められ、人類のエネルギー消費量も飛躍的に増大することになった。

しかしその帰結が、必ずしも幸福だけをもたらすわけではないということを、やがて人類は思い知ることになる。

(戸谷洋志『未来倫理』より)

問一 傍線部1「現在世代は未来世代に影響を及ぼすことができない」とはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 現在世代がどれだけ自然から搾取しようとも、未来世代にとつても同様にそれが可能であるということ。
- イ 現在世代がいくら努力しても、未来世代が自然に依存し、甘えることから脱却できないということ。
- ウ 現在世代における自然の自己修復能力は、未来世代のそれと必ずしも同じとは限らないということ。
- エ 現在世代がいくら自然保護の重要性を訴えても、未来世代がそれを理解してくれるとは限らないということ。
- オ 現在世代が自然の自己修復能力を楽観的に信じていても、未来世代も同様に考えてくれるとは限らないということ。

問二 傍線部2「自然ファースト」な発想」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 技術を発展させるよりも、自然をただ模倣して生活することを優先した方が人間は幸福になれるという発想。
- イ 自然の模倣から生み出される技術は、模倣の対象である自然とその観察よりも先には存在しえないという発想。
- ウ 技術の模倣や自然の観察を行うおうにも、まずは自然が存在しなければ我々の生活すらままならないという発想。
- エ 模倣によって生み出される技術よりも、模倣の対象である自然こそが優先されるべき上位者であるという発想。
- オ 自然の観察とその仕組みの解明をこそ優先すべきであり、技術への応用などは考えるべきではないという発想。

問三 傍線部3「自然をただありのままに観察していても、自然を理解することはできない」とあるが、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人工的に再現された自然よりも、ありのままの自然を観察しなければ、自然の本質に迫ることはできないから。
- イ 自然は人間を越えた存在であり、人間の理解が及ぶものではないため、それを理解した気になっても無駄だから。
- ウ 自然を観察して考えたことはまだ仮説に過ぎず、その仮説は検証しなければ正しいかどうか分からないから。
- エ 自然の本質は、自然そのものではなく、実験を重ねて得られる技術の中にしか垣間見ることができないから。
- オ 自然を理解するために不可欠な技術が、自然の観察を通じてしか得られない、というパラドックスに陥るから。

問四 傍線部4「技術ファースト」な考え方」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 自然を模倣した結果として技術を手に入れるのではなく、技術があるからこそ自然の解明が可能になるという考え。
- イ 自然を観察して得られる知識よりも、技術を理解して得られる知識の方が、人間にとっては大切だという考え。
- ウ 自然をただ観察するだけでなく支配するためには、自然を操作するための技術こそが最も重要であるという考え。
- エ 自然を利用することで成り立つ人間の生活は、自然の模倣を通じて得られる技術なくしては不可能だという考え。
- オ 自然を理解するためには自然そのものは必要なく、人工的に自然環境を作り出す技術があれば十分だという考え。

問五 空欄 X に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 統べる
- イ 弄ぶ もてあそぶ
- ウ 養う
- エ 相克する
- オ 庇護する ひご
- カ 凌駕する りょうが

問六 傍線部5「神の永遠不変の活動に参与する」とはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 神が創った自然をただ傍観するのではなく、よく観察し、これを保全することで神に協力しながら生きること。
- イ 永遠に自己修復する自然に甘えるだけでなく、よく観察することでその仕組みを解き明かすために生きること。
- ウ 科学の発展も視野に入れつつ、幸福を追求するために自然を観察し、自然とともに人類が永遠に生き続けること。
- エ 自然をひたすら観察し、そこから得られる技術をまた自然へと還元することで、生命の営みを永遠に続けること。
- オ 自然をありのまま観察し、神が創造した世界の普遍の摂理を理解することでその一部となって生きてゆくこと。

問七 本文の内容に合致するものを、つぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア アリストテレスは、技術をより発展させるために自然を観察・模倣するという行為を励行し、自然をただありのままに観察する「観想」こそ価値ある行為と捉え、それが幸福な生き方に直結すると考えた。
- イ ダ・ヴィンチは、自然の摂理を解明するために鳥の羽のしくみとその動きに関する観察を入念に行い、それを飛行機という技術に落とし込んで、技術に関する自身の説を裏付けようとした。
- ウ ベーコンは、実験という営みを通じて技術を肯定的に捉え、その技術によって人間が自然を支配することも肯定したが、それが後に大きな思想的潮流を生み出し、産業革命へとつながった。
- エ ガリレオは、ボールの落下実験を行うことで、技術とは自然の模倣であるというアリストテレスの技術観に異を唱えたが、ベーコンもその考えを支持したことで、その後の思想の一大潮流を形成した。
- オ 自然ファーストな考えをするアリストテレスやダ・ヴィンチと技術ファーストな考え方をするベーコンやガリレオの違いは、次世代への影響について考慮していたか否かという点に集約される。

問八 傍線部6「科学と技術の営みが目指すもの」とは何か。つぎの形式にしたがって二十字以上、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

(下書き用)

30
20
こと。

こと。

●以下の問題〔四〕〔五〕は、文学部日本文学科を志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

近頃、常陸の国たかの郡に一人の上人ありけり。大きな猿を飼ひけり。件の上人、如法經書^{くたん}かんとて、楮^こをこなして料紙^{によほふきやう}漉^すきけるとき、この猿にむかひて、「汝、人なりせば、これほどの大願に助成などはしてまし。畜生^すの身、くち惜しとは思はぬか」と言ひたりければ、猿うち聞きて、なにとか言^Aふらん、口をはたらかせども、聞き知る人なし。かくてその夜、猿失せにけり。朝に求むれども、すべて行きがたを知らず。

はやくこの猿、他の郡へ行きてけり。或る人のもとに白栗毛なる馬を飼ひける馬屋にいたりて、件の馬を盗みてけり。いくにてかとりたりけん、下臍^{*}のきる手なしといふ布着物きて、鎌こしに差して、編み笠を 着たりける。その馬にうち乗りて聖のもとへ行きけるを、馬ぬし追ひて来けり。猿かねてその心²をえて、人離れの山の岨^{そは*}、野中などを来ければ、馬ぬしも見あはで、人に問ひければ、「その山の岨、その野の中を 、十四五ばかりなる童は、その毛の馬に乗りて行きつれ」と答へければ、その道にかかりて追ひて行くに、はやく馬ぬしの来ざりけるさきに、この猿、聖のもとに来て、馬つなぎで、なにとか言ふらん、聖にむかひてさまさまにくどき事をしける折³ふし、馬ぬし追ひて来たりけり。

上人、この次第をありのままにはじめより語りて猿を見せければ、馬ぬし、「かくほどの不思議にて候はんには、いかでかこの馬返し給ひ候ふべき。畜生だにも如法經の助成の志候ひて、かかる不思議をつかうまつりて候ふに、まして人倫の身にて、なか結縁したてまつらざらん。速やかにこの馬をば法華經にたてまつるべし」と言ひて帰りにけり。なさけある馬ぬしなり。この事さらにうきたる事にあらず。「まさしくその猿見たりし」とて語り申す人侍り。

（『古今著聞集』より）

問五 傍線部3「かくほどの不思議にて候はんには、いかでかこの馬返し給ひ候ふべき」とあるが、その意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア このように納得できないことばかり起こりますので、この馬をあなたにお返ししたくはありません。
- イ これ以上殊勝な出来事が起こりましたら、何とかしてあなたにこの馬をさしあげることにならしましょう。
- ウ このように理解しがたい話をされるのでしたら、なんとしてもこの馬をお返ししたくありません。
- エ これほど人知を超えたことが起こるのでしたら、どう考えてもこの馬をお返ししてくださる方法はありません。
- オ これほど奇特なことでありますなら、どうしてこの馬をお返ししてくださる必要がありますでしょうか。

問六 波線部A「なにとか言ふらん」とあるが、ここで猿はどのようなことを言いたかったのか。その内容をまとめて、解答欄に記せ。ただし、「大願」「助成」「畜生」の語を用いてはならない。

問七 『古今著聞集』と同じ時代に成立した同じジャンルの作品をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 今昔物語集
- イ 大鏡
- ウ 新古今和歌集
- エ 宇治拾遺物語
- オ 醒睡笑

〔五〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

京^{*}邑^ニ有^リ士^ノ人^ノ婦^ト。大^{イニ}妬^キ忌^シ於^テ夫^ニ。小^ア則^ズ罵^ズ詈^ス。大^ハ必^ズ捶^ス打^ダ。
常^ニ以^テ長^ク繩^ヲ繫^ギ夫^ノ脚^ヲ。且¹喚^ビ便^ニ牽^ク繩^ヲ。士^ノ人^ノ密^{カニ}与^ヒ巫^ト。巫^ト嫗^ト為^ス。
計^ヲ因^リ婦^ノ眠^{ルニ}。士^ノ人^ノ入^リ廁^ニ。以^テ繩^ヲ繫^ギ羊^ニ。士^ノ人^ノ縁^レ牆^{カキニ}走^リ避^ク。婦^ト
覺^{メテ}牽^レ繩^ヲ而^テ羊^ヲ至^リ。大^{イニ}驚^ク怪^シ。召^{シテ}問^フ巫^ト。巫^ト曰^{ハク}。娘^ハ積^ミ惡^ヲ。先^ニ人^ト
怪^ク責^ス。故^ニ郎^ト君^ト變^{ジテ}成^ル羊^ト。若^シ能^ク改^メ悔^ム。乃^チ可^ク祈^ヒ請^フ。婦^ト因^{リテ}悲^シ
号^シ。抱^{キテ}羊^ヲ慟^ク哭^ク。自^ラ咎^ム。悔^{シテ}誓^フ。師^ト嫗^ト乃^チ令^ズ七^日齋^ス。拳^ク家^ヲ大^ク
小^シ悉^ク避^ク於^テ室^中。祭^ル鬼^ノ神^ト。師^ハ祝^シ羊^ノ。還^リ復^ス。本^ニ形^ニ。婿^ト徐^ク
徐^ニ還^ル。婦^ト見^テ婿^ヲ啼^キ。問^{ヒテ}曰^{ハク}。多^ク日^ヲ作^リ羊^ト。不^ラ乃^チ辛^ク苦^シ耶^ト。婿^ト曰^{ハク}。
猶^ホ憶^ヒ啖^レ草^ヲ不^レ美^シ。腹^中痛^ム。爾^ノ婦^ト愈^ク悲^シ哀^シ。後^ニ復^タ妬^ク忌^シ婿^ト。
因^{リテ}伏^{シテ}地^ニ。作^リ羊^ト鳴^ク。婦^ト驚^キ起^リ。徒^ニ跣^{シテ}呼^{ビテ}先^ニ人^ヲ。為^シ誓^{ヒテ}。不^レ復^タ敢^{ハテ}

爾しから於此不復妬忌。

(『妬記』より)

【注】

- *京邑 都。
- *妬忌 焼きもちを焼く。
- *捶打 鞭で打つ。
- *巫嫗 年老いた巫女。後文に見える「師」も、この巫女を指す。
- *先人 先祖。
- *怪責 とがめる。
- *郎君 男性に対する尊称。ここでは、「士人」を指す。
- *咎悔 過ちを悔い改める。
- *婿 おとこ夫。「士人」を指す。
- *徐徐 そつと。
- *徒跣 はだしになる。自らの過ちを認め、罪に服することを示す行為。

問一 波線部 a「則」b「故」c「愈」の読み方を、送り仮名も含めてそれぞれひらがなで解答欄に記せ。なお、歴史的仮名遣いでも現代仮名遣いでもよい。

問二 傍線部 1「且喚便牽繩」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 夫の名前を大声で呼びながら縄を引っ張った。
- イ 縄を引っ張ると夫を呼べるので便利であった。
- ウ とりあえず大声をあげてから縄を引っ張った。
- エ 縄を引っ張りつつ大声をあげるのが常だった。
- オ 夫を呼び寄せようとする時は縄を引っ張った。

問三 傍線部 2「若能改悔、乃可祈請」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア どうやら悔い改めたようなので、今度は祈ってください。
- イ 悔い改めることができるのなら、祈ってさしあげましょう。
- ウ その若さで悔い改められたのだから、祈ることもできません。
- エ 悔い改めることができても、祈らなければ意味がありません。
- オ あなたが悔い改めてくれたので、祈ってあげられます。

問四 傍線部3「媼乃令七日齋、挙家大小悉避於室中」の書き下し文は「媼乃ち七日齋し、家の大小を挙げて悉く室中に避けしめ」であるが、これにしたがって、解答欄の文に返り点を付けよ。なお、送り仮名を付ける必要はない。

問五 傍線部4「於此不復妬忌」とあるが、なぜか。つぎの形式にしたがって十字以上、二十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

から。

(下書き用)

20 10
から。